

Title	＜翻訳＞ フレイ神官ラヴンケルの物語
Author(s)	菅原, 邦城
Citation	大阪外国語大学学報. 21 p.135-p.149
Issue Date	1969-03-20
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80357
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

フレイ神官ラヴンケルの物語

菅 原 邦 城 (訳註)

HRAFNKELS SAGA FREYSGOÐA

—Translated from the Old Icelandic and annotated—

by Kunishiro SUGAWARA

FOREWORD

It was about ten years ago that a few Icelandic short stories were done into Japanese for the first time, if not directly from the Icelandic. Since then a few enthusiastic people also in Japan have emphasized the importance of the culture preserved in an island country in the North Atlantic Ocean, specially its important position in the Medieval European literature. Those who study things Germanic, above all, culture of the Old Germanic peoples could not neglect the existence of the Icelanders in most respects. Germanic students in Japan should earlier have recognized this fatal significance of Old Scandinavian literature.

Hrafnkels saga Freysgoða is not a “typical” saga, but cannot be ignored when we study Old Icelandic literature. I translated it from the Old Icelandic original in the summer 1968, shortly after my return home from Copenhagen where I had read the saga partly in Mr Peter Springborg’s Old Icelandic class at the University of Copenhagen. As text for this translation I used Professor Jón Helgason’s edition *Hrafnkels saga Freysgoða*, udg. af Jón Helgason, 3. udg. Kopenhagen, 1964. The saga is included also in *Íslenskh Fornrit XI*, Reykjavík, 1950 and E. V. Gordon’s *Introduction to Old Norse*, 2nd ed., Oxford, 1957. In spite of my lack of knowledge and ability, I tried to translate the saga into Japanese as literally as possible, hoping that the Japanese reader will be able to see how the saga looks like. For want of space I could not here comment on this

quite unique saga as I first wished to. Suffice it instead to cite the following:

"The composition of *Hrafnkatla* is unique for conciseness and clearness, but the style, though good, is hardly equal to the composition. The clearness is partly due to the fact that it does away with genealogies and minor characters. Instead of these it uses place names to good effect. No other saga is proportionally as rich in dialogue (53%). It is surprising how, within the narrow confines of the saga, the author succeeds in drawing the characters of eight persons, giving the reader the impression that he knows their whole lives. In this respect the saga vies with the best modern novelettes. Unlike *Gunnlaugs saga*, *Hrafnkatla* has no trace of romantic spirit, its heroic realism being so convincing that even the book-prosaists (*bókfestu-menn*) like Björn M. Ólsen took it to be a saga of tradition, dating from c. 1200. It is Nordal's merit to have shown that it is pretty nearly fictitious and about a century later." (Stefán Einarsson: *Íslensk Bókmenntasaga 874—1960*, Reykjavík, 1961, p. 184.)

Since the first decades of the last century many experts have studied this anonymous saga, and discussed much about it. The most remarkable work among them is, in many experts' view, Professor Sigurður Nordal's monograph: *Hrafnkatla* (*Studia Islandica VII*, Reykjavík, 1940), in which the great Icelandic scholar exploded the thitherto established theory that the saga was faithful to the local tradition and highly historical. A few years ago, Mr Hermann Pálsson suggested that the anonymous author could be Brandr Jónsson, bishop of Hólar (d. 1264), cf. *Hrafnkels saga og Freysgyðlingar*, Reykjavík, 1962. Excellent comments are found also in the editions by Professor Jón Helgason and by Mr Jón Jóhannesson in Danish and in Icelandic respectively.

Finally and with discipular affection I wish to thank many of the staff of the Arnamagnæan Institute in Copenhagen, who have been my guides in Icelandic, for their kindness they have shown me. Above all, my gratitude and thanks are due to Professor Jón Helgason who generously permitted me to use his edition as text for this translation.

K. S.

Osaka

9 January 1969

ここにラヴンケルの物語が始まる

I

ハッルフRez (Hallfreðr) という名の男が、アイスランド (Ísland) のブレイズ谷 (Breiðdalr) に船でやって来たのは、スヴィーア人の樵夫王オーラーヴ (Óláfr trélelgja) の子、放屁王エイステイン (Eysteinn fretr) の子、金払いは良いが食物惜しみのハールヴダン (Hálfðan hinn mildi ok hinn matarilli) の子、狩人王グズルエズ (Guðrøðr veiðikonungr) の子、黒髪王ハールヴダン (Hálfðan hinn svartí) の子、ハラルド美髪王 (Haraldr hinn hárfagri)¹⁾ の時代であった。そこはフリョート谷地区 (Flíotsdalsherað) の下手だった。船には、彼の妻とラヴンケル (Hrafnkell) という名の息子が乗っていた。息子は15歳で、前途有望で才能があった。

ハッルフRezは農場を建てた。冬にアルンスルーズ (Arnþrúðr) と呼ばれた外国人女奴隷が死に、このためにここはそれ以来アルンスルーズ屋敷 (á Arnþrúðarstöðum; Arnþrúðarstaðir)²⁾ と呼ばれている。しかし春にハッルフRezは、屋敷を荒原³⁾ の北方に移し、そこに農場を建てた。そこは牝山羊谷 (í Geitdal; Geitdalr) と呼ばれている。

さて、ハッルフRezはある夜、ひとりの男が自分の所に来て次のように言う夢をみた。「ハッルフRezよ、おまえは用心もせず横になっているが、屋敷を遠く海津川 (Lagarflíót) の西側に移せ。あそこには、おまえのすべての幸運がある」「その後で彼は眼をさまし、トゥンガ (Tungá)⁴⁾ のラング川 (Rangá)⁵⁾ の向う側に屋敷を移し、それ以来そこはハッルフRez屋敷 (á Hallfreðarstöðum; Hallfreðarstaðir) と呼ばれている。彼はそこに老人になるまで住んだ。彼は前の屋敷に山羊と豚を残してきた。ハッルフRezが移ったその日に、地滑りが起り、家を潰し、これら二匹の家畜が死んだ。そのために、そこはそれ以後牝山羊谷と呼ばれている⁶⁾。

註

- 1) 類似の系譜は、Ári Þorgilsson: *Ísleðingabók*, Snorri Sturluson: *Ynglinga saga*, *Historia Norwegiæ*, *Monumenta historica Norwegiæ* 等にもみられる。しかし、これらの資料では、樵夫王オーラーヴと放屁王エイステインとの間にもうひとりの王として白足王ハールヴダン (Hálfðan hvítbein) があげられている。これら王の綽名等に関する詳しい記述は、上のスノッリの作品にみられる。
- 2) 作品中には「前置詞+名詞」の地名が散見され、作者の地名に関する関心がみられる。訳者は、地名の主格をも併記している。この種の地名の研究としては、Arnfinn Brekk: *Om præpositionsbruken ved islandske og norske gaardnavne*, 1918 がある。尚、サーガ中の主な地名の場所については、終りの地図を参照されたい。
- 3) heiðr (cf. Goth. *haiþi*, OE *hæð*, OHG *heida*) アイスランドでは、低地の不毛の荒野ないしは丘原をいう。ここではブレイズ谷荒原 (Breiðdalsheiðr) のこと。
- 4) 普通名詞の固有名詞化。「舌状のもの、二本の川が合流する地点の土地、砂洲」の意味で、アイスランドの地名に多く用いられている。Cf. Goth. *tuggo*, OE *tunge*, OHG *zunga*.
- 5) 「おかしく曲った川」の意, *rangr* < *vrangr*, cf. OE *wringan*, MLG *wrank*, Goth. *wraiqs*, E *wrong* < ON.
- 6) 類似の記述が『開拓の書』 (*Landnamabók*) にみられる, 「男はラヴンケルといい、ラヴンの息子だ

った。彼は開拓時代に来島した。彼は最初の冬、ブレイズ谷に住んだが、春に山へ登った。スクリーザ谷 (Skríðudalur) で休み、眠った。その時、ある男が自分の所に来て、起きてできるだけ早くそこを去るように言う夢をみた。彼は起きて、立去った。彼が去るとまもなく、山全体が上から崩れた。彼が飼っていた豚と牡牛がその下敷きになった。ラヴンケルはそれから、ラヴンケル谷を開き、石堤屋敷 (Steinrøðstaðir) に住んだ。」 (Landnåma, p. 74 f. 点は訳者のもの。) この記述及び他のサーガと『ラヴンケルの物語』とを比較、照合すると、このサーガを純粹のフィクションとみなすべきであるとする学説が妥当に思える。Cf. Hrafnkatla, p. 22 f, p. 26 f.

II

ラヴンケルは夏に馬で荒原へ行くのを、常とした。当時、氷河谷 (Jökulsdalr) は橋¹⁾ まで全く開拓されていた。ラヴンケルは、フリオート谷地区を通して、氷河谷にまだ未開拓の谷間があるのを見つけた。この谷は、ラヴンケルがそれまで見た谷間のどれよりも開拓に適していると思われた。

さて、家に帰るとラヴンケルは父親に財産を分けてくれるように頼み、自分の屋敷を建てたいのだと語った。父親はこれを与え、ラヴンケルはその谷に屋敷を建て、アザルボール (á Aðal-bóli; Aðalból「館」) と呼んだ。ラヴンケルは鮭川谷 (Laxárdalr) のスキョルドールヴの娘オッドビョルグ (Oddbjörg Skiöldólfsdóttir) を妻とした。彼らには2人の息子があった。年上の息子はソーリ (þórir) といい、下のはアースビョルン (Ásbiörn) といった。

ラヴンケルはアザルボールに住んでから、(異教の神々に) 大いに犠牲を供えた。ラヴンケルはまた、大きな神所を造った。彼はどの神よりもフレイ神 (Freyr)²⁾ を好み、自分の貴重品全部を自分とフレイ神に半分づつにし、これを神に捧げた。ラヴンケルは谷全体を開拓し、多くの者に土地を与えたが、彼らの主領になることを欲し、彼らに対するゴーズィ権³⁾ を取った。これによって綽名をつけられ、フレイ神のゴーズィ⁴⁾ と呼ばれるようになった。ラヴンケルは非常に横暴な男ではあったが、才能に恵まれていた。彼は氷河谷の住民をむりやり自分のスィングメン⁵⁾ にならせた。自分の部下には親切で愛想がよかったが、氷河谷の住民には苛酷で、頑固で、誰も彼から公平な取扱いをうけた者はいなかった。

フリオート谷荒原 (Fliótsdalsheiðr) は通り抜けるのが容易でなく、石が多く湿っぽかった。それにもかかわらず、ラヴンケル父子は仲がよかったので互いに訪ねあった。この道はハッフレズには通るのが厄介に感じられ、彼はフリオート谷荒原にある山を越える道を探した。もっと乾燥した遠廻りの道をそこでみつけた。それはハッフレズ道 (Hallfreðargata) と呼ばれている。この道を通るのは、フリオート谷荒原を非常によく知っている者だけであった。

註

- 1) Brú この橋は、天然の石橋で、18世紀前半に崩れ落ちてしまったといわれている。
- 2) 北欧神話における豊穡と平和の神。ヴァン神 (sg. *vanr*; pl. *vanir*) ニョルズ (Njörðr; cf. *Nerthus* in

Tacitus: *Germania*) の息子で、愛の女神フレイヤ (Freyja) と兄妹である。『セームンドのエッダ』 (Sæmundar Edda) 中の「スキールニルの旅」 (*För Skirnir*) 及び「ロキの喧嘩」 (*Lokasenna*) 等に、この神が詳しく描かれている。Cf. Jan de Vries: *Altgermanische Religionsgeschichte* II, Berlin, 1957, p. 163 ff. Folke Ström: *Nordisk hedendom*². Göteborg, 1967, p. 175 ff.

- 3) goðorð 「ゴーズィたること、ゴーズィの権利・地位・支配地区」 (=mannaforráð)。ゴーズィ (sg. goði; pl. goðar, cf. Goth. *gudja*) とは本来、異教の儀式を司る僧侶であったが、共和国時代 (1262 年まで) のアイスランドでは世俗の権力をも有した主領をいい、この共和国の実質的な支配者であったといえる。その起源は、開拓時代 (Landnámatið c. 870-c. 930) の初期にすでに認められる。アイスランド最初の法令集たるウルヴーリョート法 (Úlfjótssög) が制定された頃 (c. 930) は全島あわせて 36 の goðorð があってと推定される。その数は時代が下るにつれて増し、965 年頃には 39, 1005 年には 48 になった。この制度は、1271 年にノルウェー法 Járnsíða (“Iron Side”) がアイスランドに適用されるに及び、廃止された。

ゴーズィの部下あるいは支持者はスィングメン (sg. *þingmaðr*; pl. *þingmenn*) とよばれた自営農民である。両者の関係は一種の契約関係であって、封建制度にみられる主従関係ではなかった。スィングメンのゴーズィに対する主要な義務は、民会 (*þing*) へゴーズィに同行し、これを民会で支持することであり、それに対してゴーズィは彼らを保護し、goðorð において警察権を行使した (共和国時代のアイスランドには、公的な行政機関は存在しなかった)。ゴーズィはそのほかに、地区民会 (*heraðsþing*) を主宰し、大民会 (*Alþingi*) において立法者の役割を果し、また判事を指名した。

goðorð は大体において、開拓時代以来の有力者の子孫が代々相続したが、売買・貸借・分割することができた。しかしながら、これは原則として、*veldi er þat, en eigi fé* (権力であって、財産ではない)——十分の一税法——であった。Cf. *KLNM* Bd. V. 1960, col. 363 ff.

- 4) Freysgoði この諱名は þórðr Ózurarson にもつけられた (*Landnám*, p. 30)。Cf. *Hrafnkatla*, p. 32, E.H. Lind: *Norsk-isländska personbinamn från medeltiden*. 1920 f.
- 5) 註3) を参照されたい。自営農民は、ゴーズィとスィングメンの関係の性格から判断して、自分の住む地区外の主領をその保護者・擁護者として選ぶことも可能であったが、これは実用的な理由から実際は行われることがまれであったと考えられる。

III

ビャルニ (Biarni) という名の男がいた。彼は泉屋敷 (at Laugarhúsum; Laugarhús) と呼ばれる農場に住んでいた。それはラヴンケル谷 (Hrafnkelsdalr) の側にあった。ビャルニは結婚していて、妻との間に二人の息子があった。ひとりはサム (Sámr) といい、もうひとりはエイヴィンド (Eyvindr) といって、美男で、末頼しい男達だった。エイヴィンドは父親と家にいたが、サムは結婚して谷の北側の遊び小屋 (á Leikskálum; Leikskálar) と呼ばれた屋敷に住んで、非常な財産があった。サムは非常に横暴な男だったが、法律に詳しくあった。一方エイヴィンドは商人になり、アイスランドからノルウェー (Nóregr) に出かけ、冬はそこに滞在した。彼はそこから諸国に旅し、ミクラガルズ (Miklagarðr)¹⁾ に滞り、そこでギリシャ人の王から大いなる栄誉を得て、しばらく住んだ。

ラヴンケルは、他のよりも立派と思われる家畜を所有していた。それは馬で、色はネズミ色で背中に黒い線が一本はしっていた。彼はそれをフレイファクスィ (Freyfaxi 「フレイの馬」) と

呼んだ。彼はこの馬を、友人たるフレイ神に半分捧げた。彼はこの馬に非常な愛情をもち、自分の意志に反してこの馬に乗った者は殺すという誓いをたてた程だった。

註

- 1) 「大都」の意。東ローマ帝国の首府コンスタンティノーブルをいう。エイヴィンドや、後出のソルケル＝ショースタルソンのコンスタンティノーブル滞在は、フィクションであろう (Cf. *Hrafnkatla*, p. 24). アイスランド人が東ローマ皇帝の親衛隊 (*Væringjar*) の一員として活躍した記述は、他のサーガにもみられる (Exx. Snorri Sturluson: *Haralds saga harðráða* の Halldór Snorrason, *Laxdæla saga* の Bolli Bollason, *Njáls saga* の Kolskeggr Hámundarson).

IV

ソルビョルン (*þorbiörn*) という男がいた。彼はビャルニの弟で、ラヴンケル谷にある丘 (at Hóli; Hóll) という屋敷に住んでいた。これはアザルボールに対して東側にあった。ソルビョルンはあまり財産をもたなかったが、子福者だった。息子のひとりはいナル (Einarr) といって、長子であった。これは大きくて頑丈で、仕事をよく仕込まれていた。

ある春のこと、ソルビョルンはいナルに奉公先を探してはどうかと言った。

「というのは、<ここにいる>連中以外に手助けはいらん。またおまえは仕事を立派に仕込まれているのだから、奉公先はいっぱいあるはずだ。おまえを手離すのは、わしにおまえに対する愛情がないからではない。なにしろおまえは、わしの子供の中で一番役に立つのだから。むしろわしの無能力と貧乏のためだ。他の子供達が手助けになってくれるし、おまえの方がこの子供達よりも奉公に向いている」

いナルは答える、「今頃そんなことを言うのは遅すぎるよ。いい奉公先はとうに他の連中が取ってしまっていて、今残っているのは悪いところだけだと思うよ」

ある日、いナルは馬を出してアザルボールに行った。ラヴンケルは女部屋¹⁾にいた。彼はいナルにやさしく愛想のよい挨拶をした。いナルは、ラヴンケルの所に奉公を求めたのだった。

彼は答えた、「おまえなら誰よりも真先に雇ったのに、どうしてこんなに遅く奉公を求めてきたんだ。今はもう奉公人を全部雇ってしまっている。たったひとつ、おまえがやりたくないような仕事を除いてはな」

それはどんなものかと、いナルは訊ねた。

ラヴンケルは、羊番をする者をまだ雇っていないが、それには仕事上手の男が必要なのだと言った。どんな仕事でもかまわないが、二期²⁾の住込みをしたいと、いナルは言った。

「おまえに今すぐ条件をだそう」とラヴンケルは言った、「おまえは五十頭の羊を山小屋においてゆき、夏に使う薪を集めにゃならん。これをおまえは二期分の仕事としてやる。ところでおまえに、他の奉公人と同様にあることを覚えていてもらいたい。フレイファクシが仲間の馬と

谷を歩いている。これにおまえは冬も夏も気をつけにゃならん。ひとつおまえに警告しておきたいことがある。どんな必要に迫られようとも、おまえにこの馬に乗ってほしくない。わしはこれについて、この馬に乗った者は殺すという堅い誓いをたてているのだから。この馬には十二頭の牝馬がついている。このうちどれもおまえのすきなのに、夜でも昼でも乗っていい。わしの言ったようにやれ。『他人の言うことに気をつける者は悪い目にはあわない』という古い諺³⁾もある。これで、わしがどんなことを誓ったかわかったな」

他にも沢山いるのなら、なにも自分に禁じられている馬に乗る程悪意のある自分ではないと、エイナルは言った。

註

- 1) *stofa* (pl. *stofur*, cf. OE *stofa*, *stofu*, OHG *stuba*) この語は ON では、*skáli*「広間、男部屋」の対語として「婦人のいる居間」の意で使われることがよくある。Ex. *ganga inn ok finna stofu, þar satu konur tvær* (彼らは中に入り、二人の女がいた女部屋をみつける)——*Færeyinga saga*, ch. 41.
- 2) 1 期 (*misseri* < PN * *miss-jári*「季節の移り変り」が原意, cf. OE *missere*).「6ヶ月、半年」を意味するが、よく複数(*misseri*)で「12ヶ月、1年」をも意味する。Ex. *Færeyingar hafa nýtt kjöt öllum misserum* (フェーロー人は一年中肉を食べている)——*Færeyinga saga*, ch. 248.
- 3) *forn orðskviðr* このサーガ作者は諺に格別の興味を示し、chs. VII, X, XIV, XV, XVII にも諺がある。

V

エイナルは、衣類をとってくるために家に帰ってから、アザルボールに戻った。その後、彼はラヴンケル谷の上手にある山牧草地小屋 (*á Griótteigsseli*; *Griótteigssel*) と呼ばれている山小屋に羊をつれていった。夏にエイナルにはすべてがうまくゆき、真夏¹⁾まで羊がいなくなることは全くなかった。ところが、ある夜三十頭程の牝羊が消えてしまった。エイナルは牧草地を隅なく探したが、一頭も見つけられなかった。こうして約一週間、羊は行方不明のままだった。

ある朝、エイナルは早く外に出た。その時には南霧²⁾が晴れ、小雨も上っていた。棒と手綱と鞍敷を手にもち、彼は石牧草地川 (*Griótteigsá*) を渡った。この川は山小屋の前を流れている。ところで砂洲には、夕方小屋にいた羊がうずくまっていた。エイナルはこれらの羊を小屋においてゆき、行方不明になっている羊を探し始めた。砂洲に一群の馬がいるのを見、どれか馬を捕えて乗ることを考えた。歩くよりも馬に乗ったら、もっと速く進めることは確かだと思ったのである。彼は馬に近づき、追いかけたが、人に乗られる習慣が全然ない馬は怖じた。しかし、フレイファクシー頭だけは別であった。これは、まるで地に埋められてしまったかのように、おとなしかった。

エイナルは、朝が過ぎているのを知り、たとえ自分がフレイファクシーに乗っても、ラヴンケルはわからないだろうと思った。そこで彼はこの馬を捕えて手綱をつけ、背に鞍敷をおいた。彼

は石川溪谷 (Griótárgil) に沿ってゆき、氷河に達し、氷河川 (Jökulsá) が氷河に入る所で氷河沿いに西に向い、それから川に沿って煙小屋 (Reykjasel) に来た。エイナルは、誰か例の羊を見た者はないかと、小屋にいた羊飼いにきいたが、誰も見なかったと言った。

エイナルは、明け方から夕方七時³⁾頃までずうとフレイファクシに乗っていた。馬はいやがりもせず、エイナルを遠く、広く乗せて歩いた。エイナルはまだ羊を見つけ出さなかったが、家に<帰らねばならぬ>時刻で、残っている羊を小屋におってゆ<かねばならない>ことに気づいた。こうしてエイナルは、馬で東に向って山の背を越えてラヴンケル谷へと下っていったが、彼が石牧草地 (Griótteigr) に来た時、前に通った溪谷の上手で羊の鳴くのを聞いた。彼がそっちに方向をかえると、三十頭の羊が自分の方へ走ってくるのを見た。これは、一週間前にいなかった羊であった。こうして彼はこれを小屋に戻し、他の羊といっしょにした。

フレイファクシは、全身汗でびしょびしょに濡れ、汗が毛一本一本から滴る程で、非常に汚れ、疲れきっていた。馬は十二回程転がってから、大きな嘶きをあげた。それから道をすごい勢いで走り出した。エイナルは馬を追いかけ捕えて、群に戻そうとした。しかし馬は、エイナルがとてもその側に寄ることなどできない位に怖えきっていた。

フレイファクシは谷を駆けおりてゆき、アザルボールにくるまで途中止まらなかった。その頃、ラヴンケルは食卓についていた。馬は戸の前にくると、ひどく高く嘶いた。

ラヴンケルは給仕していた女中に、戸の所に行くように言った、「馬が啼いているが、わしにはフレイファクシのように思われるのだが」

女中は戸の所に出てゆき、フレイファクシが大変汚れているのを見た。女中は、フレイファクシが外にきており、非常に汚れた格好をしていると、ラヴンケルに言った。

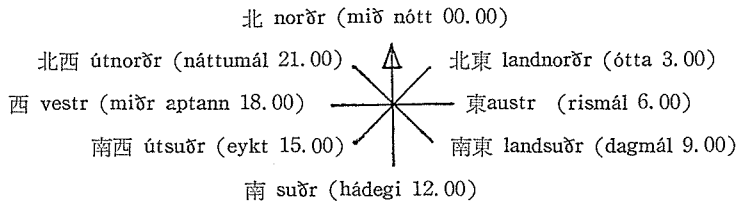
「あの馬は家に帰ってきて、何をしたいというのだろうか？」とラヴンケルは言った。「いいことではなからう」

そこで彼は外に出てゆき、フレイファクシを見て話しかけた、「息子よ⁴⁾、おまえがこんな具合に仕打ちをされたとは全く不快なことだ。でもな、わしに話せば、おまえの気持は楽になるというものだ。この仇はきっと討ってやる。おまえは仲間の所に戻れ」

馬は直ちに谷を上ってその群の所にいった。

註

- 1) miðsumar 6月13日～20日の1日である。Cf. Martin P:n Nilsson: *Tidsregning.* (Nodisk Kultur XXI). 1934, p. 64, p. 70.
- 2) sunnapoka 南の方向から流れてくる霧。
- 3) 1日の時刻は、太陽の位置によって決定された。したがって夏と冬では最高1時間程度の誤差が生じることになる。rismál (「起床の時刻」の意) は、夏では午前5時頃だが、冬では午前6時頃になる。dagmál (「昼食」, =Lat. *hora tertia*——*Homilubók*, ch. 142) は、夏では8時半頃で、冬では9時



半頃になる。eykt (その意味について定説はない。Cf. *AEW* p. 107, *IED* p. 135) は、日の短かい冬では午後2時半頃だが、逆に夏では午後3時半頃になる。miðr aptann (「真夕方」) は、冬では午後6時頃、夏では7時頃になる。時刻と太陽のある方向を、大体上のように図式化できる。

- 4) 原テキストでは、「わが養子よ」(*fóstri minn*) となっている。ラウンケルが、いかにこの馬をかわいがっていたか、これによってわかる。

VI

ラウンケルは夕方床につき、その夜はぐっすりと眠った。しかし朝には馬を出させ、鞍をつけさせて、山小屋に上っていった。彼は黒っぽい服装で¹⁾ 出かけた。手には斧をもっていたが、他に武器はもたなかった。エイナルはその頃羊を囲いに入れたところだった。彼は囲いの柵にさがり、羊の数をかぞえていた。召使い女達は乳を搾っていた。彼らはラウンケルに挨拶した。彼は使用人達に、どんな具合か訊ねた。

エイナルは答える、「わたしはとんだ目にあいました。三十頭の牝羊が一週間近くも見えなくなったんですから。でも今は見つかっています」

そんなことを責めはしないと彼は言った、「ところで、それよりも悪いことは起らなかったか？ 羊が行方不明になるのは、思ったよりもそうしばしばあったわけでもあるまい。しかし、おまえは昨日フレイファクシに乗りはしなかったか？」

彼は、自分はそれを否定できないと言った。

ラウンケルは答える、「おまえに許された馬が他に沢山いるのに、どうしてこの禁じられている馬に乗ったのだ？ もしわしがあればほどに堅く誓っておらねば、おまえがあっさり白状したとだし、今度だけ許してやりたいのだが」

しかし、厳粛な誓いのために呪われる者には確なことはないという信念から、ラウンケルは馬からエイナルの所にとびおり、これに致命の一撃をあげた。

ラウンケルは、事をかように片づけてからアザルボールに戻り、この出来事を語った²⁾。それから他の男を山小屋の羊の所にゆかせた。しかしエイナル(の死体)は山小屋の西にある坂へと運ばせ、墓の傍に石塚を建てさせた。これはエイナル塚(*Einarsvarða*)と呼ばれており、この上に太陽がくると山小屋では「真夕方」と考えられている。

註

- 1) í blám klæðum; *blár* は語原的に、OE *blæw*, OHG *blāo* と同じく「青い」の意である。この語はしかしながら、「暗い、黒い」の意に用いられることも珍しくなく、以下のような例がある。*blár hrafn* 「黒い鴉」、*blár sem kol* 「石炭のように黒い」、*blámaðr* 「黒人」、*Bláland* 「北アフリカ、エチオピア」、*Haraldr blátǫnn* 「黒い出歯のハラルド」(＝ハーラル青歯王、デンマーク史初期の王)。
- 2) 次章の註 1) を参照されたい。

VII

ソルビョルンは、丘屋敷で息子エイナル殺し¹⁾を聞いた。彼はこの出来事のため、大層悲嘆にくれた。さて、ソルビョルンは馬を出してアザルボールに行き、ラヴンケルに息子殺しの補償を要求した。

彼は、今度ばかりでなくほかにも多く人を殺してきたと言った、「おまえは、わしが誰にも補償を与える気のないのを知らぬわけじゃあるまいし、これをみんな我慢するようになっている。だが今度わしのやったことは、これまでやってきた人殺しの中で最も悪かったように思われる。おまえは長い間わしの隣人だし、おまえには十分満足している。これは、お互いにそうだ。もし<あいつが>あの馬に乗りさえしなかったら、わしとエイナルの間にはとるに足りないことしか起らなかったろう。しかしわしらはよく、口数の多いことを後悔せざるを得ないことがあり、多くよりも少なくしゃべるのを悔まねばならないということは滅多にない。今度わしのやったことは、これまでやったことのどれよりも悪いと思っているのを示そう。夏には乳を出す家畜で、秋には潰した家畜でおまえに償いをしよう。またおまえが(この屋敷に)住んでいたい間は、おまえを養おう。わしが面倒を見て、二人でおまえの息子・娘に仕事を見つけてやり、また彼らが楽な生活ができるように後援もしよう。わしの所有物であるのを知っているもので、おまえが必要とするもの全部をわしに言ってくれ。そうすれば、おまえは必要とするものに長いこと困らんだろう。おまえはすきな間は(ここに)住み、それにあきたら向うに(おまえの家に)行ったらいい。わしはおまえを最期まで面倒みよう。こういうことで和解しよう。多くの者が、あの男はとても高くついたと言うことだろう」

「わしはこの条件が気にいらん」とソルビョルンは言う。

「では何を望むのだ？」とラヴンケルは言う。

そこでソルビョルンは言う、「わしは、他の連中をわしらの間にたてたらと思っている」

ラヴンケルは答える、「おまえはわしと対等だと思っているのだな。だが、わしらはそんなふうには和解できんぞ」

そうしてソルビョルンは立ち去り、地区を歩いていった。彼は泉屋敷に来て、兄のビャルニに会い、この出来事を話し、この件で何か援助をしてくれるように頼んだ。

ビャルニは、自分はラヴンケルと争える位に彼と対等でないと言った、「しかし、たとえわしらが大金をもっている、ラヴンケルとは争えないだろう。『己を知る者は賢い』ともいうしな。裁判であいつは、わしらよりもはるかに力のある者を多く困難に陥れてきている。そんなにいい条件を拒んだとはおまえは思慮が足りなかったと思うな。わしは、このことには関係したくない」

そこでソルビョルンは兄にこっぴどい言葉を浴びせ、兄の度胸はことが危くなればなる程なくなってゆくとやった。こうして彼は去ってゆき、兄弟は不仲のまま別れてしまった。

ソルビョルンは、途中休みもせず遊び小屋屋敷に来て、戸を叩いた。誰かが戸の所にやってきた。ソルビョルンは、サームに外に出てくれるように頼んだ²⁾。サームは叔父に懇ろに挨拶し、自分の所に滞るようにと言った。ソルビョルンはこれをいささか冷たく受けた。サームはこのソルビョルンの気落ちに、気づいて、消息を訊ねた。彼は息子エイナル殺しを伝えた。

「ラヴンケルが人を殺したとしても大したニュースではない」とサームは言う。

ソルビョルンはサームに、自分に何か援助を与えてくれるかどうか訊ねた。「この事件は、（殺された）男はわしに一番近い者だが、（死の）一撃はおまえ達にも遠くはない³⁾ という案配になっている」

「ラヴンケルに補償を求めてみたのか？」

ソルビョルンは、自分とラヴンケルとの間に起ったことをありのままに語ってきかせた。

サームは言う、「あんたのようなひとにラヴンケルが何かを申し出たとは、きいたこともなかった。それでは、わしがあんたと一緒にアザルボールに行き、ラヴンケルと控え目に話をし、まだ申し出を守るつもりかどうか見極めよう。いずれにせよ、ラヴンケルはよくするだろう」

ソルビョルンは言う、「もうラヴンケルはその気ではないし、わしもあそこを後にしてからそれを考えもしとらん」

サームは言う、「裁判でラヴンケルと争うのは、わしにはむづかしい」

ソルビョルンは答える、「何でもおまえらの眼には大きくみえて⁴⁾、おまえら若い連中は成功など覚束ないだろう。おまえのような男共は確な具合には振舞えんのだろ。おまえは法律に詳しいようだし、つまらぬことにはよく関係する。しかしこのはっきりした事件を引受けたがらない。それでおまえは大変な責めを受けるだろうし、それは当然のことだ。なにしろおまえは、わしら一族で一番のでしゃばりだからな。成行きがどうなるかみることにしよう」

サームは答える、「わしがこの訴訟を引受けて、わしらが裁判を（途中で）諦めざるを得なくなったとしたら、一体あんたはそれ以前よりもどれだけの利益を得るというのだ？」

ソルビョルンは答える、「そうだったとしても、おまえが訴訟を引受けることが、わしには大きな心の慰めとなるのだ。物事はならねばならぬようになるだろう」

サームは答える、「わしは不本意ながらもこれを引受けよう。これは、あんたとの親類関係のためにやるのだ。あんたは、（わしがこうするのは）あんたのような馬鹿者を助けるとしか思っ

ていないということを、承知しなければならん」

それからサームは（ソルビョルンに）手を差出して、ソルビョルンの訴訟を引受けた⁵⁾。

註

- 1) víg (Cf. OE, OHG *wig*) 殺人行為直後に加害者が現場から遠くとも3番目の屋敷まで来て、その行為を公けにすれば（動詞 *lýsa vígi*, 名詞 *víglýsing*）それは法的に víg と呼ばれた。加害者は法にしたがって訴えられるが、もし訴訟人や被害者の身内の同意があれば、補償で解決できた。この殺人行為は、法的に何ら悪い行為ではなかった。もし *víglýsing*（「殺人公表」）が行われないと、この行為は法律上 *morð* であり、加害者は *morðvargr*（「人殺し」）と呼ばれた。この場合、加害者は法律の保護外におかれ、被害者の身内から復讐されるのを予想せねばならなかった。夜間人を殺すこと（*náttvíg*）や、眠っている人を殺すのも *morð* と規定された。以上2種の中間の殺人行為に、*launvíg* といわれるものがあった。この場合、加害者はその行為を公表しないが、被害者の死体の傍に加害者が誰であるかはっきりわかる剣などの証拠物を残しておいた（*þat vóru kǫlluð launvíg en ekki morð, er menn létu vápn eftir í beinni standa*（ひとが武器を死体のところに残した時は、*launvíg* と呼ばれて *morð* とは呼ばれなかった）——*Gísla saga*, ch. 22）。
- 2) ソルビョルンは、サームと秘密の話をしたいために、戸外に出るように頼んだわけである。たとえ、その家に広間（*skáli*）も居間（*stofa*）もあったとしても、その中には普通家族や使用人がいて、二人だけで話することはできなかった。
- 3) *er yör eigi fjarri hoggvit*「殺された者は、おまえ達にとっても近親である」の意。ビャルニとソルビョルンは兄弟であり、サームとエイナルは従兄弟同士になる。
- 4) *yör vex alt í augu*「あらゆることがむづかしすぎてやれないと、おまえ達は思うのだ」の意。
- 5) ラヴンケルに対する血讐を行えるのは、法的には一等親たる父親のソルビョルが第一位である。しかし、ここに述べられている手続を経て、復讐の権利と義務はサームに譲られたわけである。

VIII

サームは馬を出させて、谷を上っていった。ある農場にいくと、殺人事件を公けにし、ラヴンケルに対抗すべく部下を得た。ラヴンケルはこれを聞き、サームが自分に対する訴訟を引受けたとは笑止千万なことだと思った。

さて冬は過ぎて、春に召喚日がやってきた時、サームはアザルボールに上ってゆき、ラヴンケルをエイナル殺して（民会に）召喚した¹⁾。その後サームは谷を通り抜けて、自分の証人に民会行きを求めた。そして皆が民会行きの準備を整えるまで、彼は静かにしていた。

その頃ラヴンケルは部下を谷中に送り、部下を呼び集めた。彼は七十名のスィングメンを連れて出発した。彼の一行は東のフリュート谷を越え、川の上手を廻って、スクリーザ谷（*Skrfáudalr*）「山崩れの谷」への屋根を横断した。さらにスクリーザ谷に沿って上ってゆき、南の斧ケ原（*þaxarheiðr*）を越え、牝熊湾（*Berufiqrðr*）に出たが、そこからスィーザ（*Síða*「沿岸、海岸地帯」）へは大民会（*Alþingi*）へ行く道があった。大民会広原（*þingvöllr*）²⁾まで、フリュート谷から17日の行程である³⁾。

ところで、ラウンケルが地区を出た後、サームは自分の所に部下を集めた。彼は、放浪者⁴⁾を一番多く旅に連れてゆくことになった。すでに召集してある農民も一緒だった。彼はこの部下に武器・衣服及び食糧を与えた。サームは谷から（ラウンケルとは）別の道を行った。彼は北へ橋まで行って、これを渡り、そこから茜ヶ谷荒原（Mǫðrudalsheiðr）を越えて、夜は茜ヶ谷（Mǫðrudalr）に泊った。それより広肩台（Herðibreiðstunga）に達し、黒ヶ嶽（Bláfell）を越え、曲り谷（Króksdalr）に入り、南のサンド（Sandr「砂」）に来て、サンド丘（Sandafell）に行き、そこから大民会広原に到着した。ラウンケルはまだそこに来ていなかった。ラウンケルは遠廻りをしたので、時間がかかったのである。サームは、東部地方の人々（Austfirðingar）がいつも天幕を掛ける所から近くない場所に、部下のための小屋に天幕を掛けた⁵⁾。ラウンケルは、しばらく遅れて民会に到着した。彼はいつものように天幕を掛けた。そして、サームが民会に来ているのを聞き、それを笑止千万なことと思った。

この民会⁶⁾には非常に多くの人が集まった。そこには、当時アイスランドにいた主領の大多数が来ていた。サームは主領全部に会って、自分への援助と支持を頼んだ⁷⁾。しかし皆、同じ答えをした。ラウンケル＝ゴーズィと争って自分の名誉を危うくする程サームとは親しくない、と言ったのである。ラウンケルと民会で争ったものの大多数はみんな同じ目にあっている—ラウンケルはすべての者に自分に対して起した訴訟を放棄するように脅かしてきたとも主領達は言った。

サームは自分の小屋に戻った。二人の親戚は、塞ぎこんでしまい、自分達の訴訟が恥辱と不面目を得るだけに終るのではないかと懸念した。二人は非常に心配で夜も眠れず、食事も喉を通らぬ程だった。何故なら、援助を与えてくれるだろうと期待していた主領も含め、どの主領も彼らに援助を拒否したからである。

註

- 1) これは、ラウンケルを訴えるのに不可欠の手続きである。963年頃に、「殺人事件は召喚の場所に最も近い民会に訴ねばならない、との法律があった」（*Íslendingabók*, p. 20）。この法律は、物語の主人公達のうち実在の肯定されている者達が生きていたと推定される十世紀前後にまだ有効だったと考えられる。したがって、この事件は全国的な大民会ではなく、地区民会で扱われるべきものである。
- 2) ここは大民会が開かれた場所である。その略図は、山室静『アイスランド』（紀伊国屋新書、1963年、59頁）にあるので参照されたい。詳しい地図は、たとえば、Matthías Þórðarson: *Þingvöllum. Alþingisstaðurinn forni*, Reykjavík, 1945にある。（いずれも原著者の許可を得てないので、ここには載せていない。）
- 3) Suðr ór Fliótsdal eru .xvij. dagleiðir á Þingvöllum. サーガ作者が距離算出の出発点をフリオート谷にしているので、彼はこの谷の出身か、住民であったかもしれない。この作者は、フリオート谷の地理に関して非常に詳しい。Cf. *Hrafnkatla*, p. 69.
- 4) einhleypingr (pl. *einhleypingar*, cf. Scottish *landloup*). 「一人でとび歩く者」が原意）結婚せず、自分の土地を所有しない者。 búandi（「定住する者、農民、自作農」）の対語。

- 5) tjalda (búð) 主領など有力な人物は、大民会や地区民会のような定期的会議の開かれる場所 (þingstaðr) に会議の期間中自分の支持者や家族を収容する建物 (búð) を所有していた。この建物は屋根がなく、単に4つの壁だけであるため、使用する場合には、天幕で屋根を作り、壁には壁掛けを掛けた。
- 6) この民会が、前後関係からみて、地区民会ではなくて大民会であることは自明であろう。開拓時代のアイスランドには、全島共通の法律も、国家機関もなかった。930年頃ウルヴリョート (Úlfjótr, c. 864—930) が西部ノルウェーのグーラ民会法 (Gulapingslög) に範をとって編んだ法 (Úlfjótslög, c. 930) に基づいて設置されたのが、この大民会 (Alþingi, NI Alþing) である。この全国的な立法機関には、すべての自由民が参加することができた。その長は lögsgumaðr (「法を語る者」の意) と呼ばれ、共和国時代の唯一の公職であった。その主要任務は、国法を毎年三分の二つ民会広原の Lögberg (「法の岩」) で朗読し、法律に関する質問に答えることだった。その任期は3年であったから、一任期中に国法全部を語ることになる。この古い大民会は1800年に廃止されるまで存続したが、その独立的機能は共和国時代の終了 (1261—64) と同時に失われた。大民会での出来事で、アイスランド史上記憶されるものとして、イ) 全島の四地方分割 (960—65)、ロ) キリスト教の採用 (c. 1000)、ハ) 第五裁判所 (Fimmtáðmr) の設置 (c. 1004)、ニ) ノルウェー王聖オーラヴのアイスランド併合拒否 (1024)、ホ) 十分の一税導入 (1096)、ヘ) 法令の成文化 (1117) などがある。

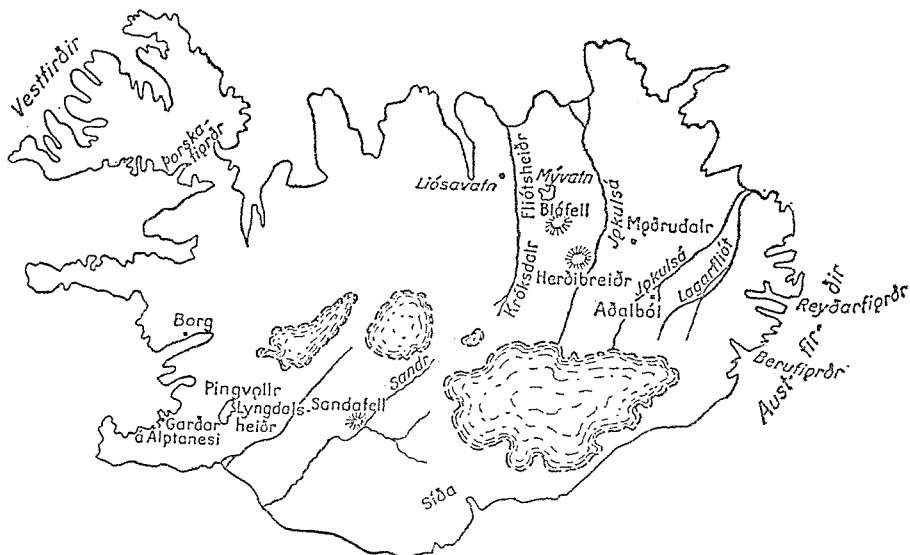
アイスランド人にとって大民会は単に政治的意義を有しただけではなく、ここはまた彼らの社交の場でもあった。年に一度、彼らが夏に民会広原に全島から集い、知己との友誼を暖め、情報を交換しあい、スポーツを競い、男女が将来の相手をみつける光景をサーガの到る所にわれわれはみることができるのである。

このサーガの作者は法律について殊更の興味をもっていたようで、大民会の描写はサーガ文学において、『ニヤールの物語』 (*Njáls saga*) と双壁をなしている。Cf. *KLNM*, Bd. I, 1956, col. 123 ff., Matthías Þórðarson: *Þingvöllur*, Reykjavík, 1945.

- 7) ソルビョルンとサムは、ラヴンケルのゴーズィ地区の住民である。今二人は身内のエイヴィンドの復讐をするために、自己のゴーズィたるラヴンケルを訴えようとしている。これに成功するためには、この横暴な主領を圧するに足る程の支持を他の主領からうけねばならなかった。ある主領が、あるシングマンが自分のゴーズィに敵対するのを助けることは、そのゴーズィから敵とみなされることを覚悟せねばならなかった。特にそれがラヴンケルのような理不尽の主領である場合、他の主領は干渉しなかったのは当然であろう。

(つづく)

ICE LAN D



EAST QUARTER OF ICELAND



(by courtesy of Professor Jón Helgason, 1968.)